キャラクター名
虚

プレイヤー名

シンドローム	ソラリス オルクス	ワークス	探偵	カヴァー	探偵
オプショナル		年齢	18	性別	男
覚醒	生誕	衝動	妄想	初期侵食率	31 %
出自	姉妹	経験	喪失	邂逅	保護

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	0	1			1
感覚	1	0	0			1
精神	2	1	0			3
社会	5	0	1			6

HP	25
行動値	5
(非装備時)	5
戦闘移動	10
全力移動	20

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ			交渉		
回避			知覚	1		意志	1		調達		
運転：	2		芸術：			知識：			情報：裏社会	3	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
使用人	
思い出の一品	
コネ：手配師	
情報収集チーム	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
Dロイス：動物使い	P	N		
妹：香枝	P 慈愛	N 不安		
保護した犬：いずなたん	P 庇護	N 偏愛		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 12	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
C:ソラリス	2	2	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	-	-	
効果： ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ：C値-LV(下限値7)								
絶対の恐怖	5	3	ﾒｼﾞｬｰ	視界	-	対決	-	
効果： 〈交渉〉：攻撃力+LVの射撃攻撃　装甲無視								
神の御言葉	5	4	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	対決	ﾘﾐｯﾄ	
効果： 〈交渉〉：攻撃力+LV*5　ｼﾅﾘｵ３回								
妖精の手	1	4	ｵｰﾄ	視界	単体	自動	-	
効果： ﾀﾞｲｽ目をひとつ１０に変更する　ｼﾅﾘｵLV回								
オーバートーズ	1	4	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	-	100%	
効果： ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑｴﾌｪｸﾄﾚﾍﾞﾙ+2　ｼﾅﾘｵLV回								
アニマルアタック	3	2	ﾒｼﾞｬｰ	視界	-	対決	Dロイス	
効果： 〈交渉〉：攻撃力+LV*4の射撃攻撃　ｼﾅﾘｵ３回								
完全なる世界	3	5	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	対決	100%	
効果： 判定ﾀﾞｲｽLV+1　攻撃力LV*3								
仕組まれた幸運	★	-	ﾒｼﾞｬｰ	至近	自身	自動	-	
効果： いかさまをする								
地獄耳	★	-	ﾒｼﾞｬｰ	至近	自身	自動	-	
効果： 聞き逃すことはなく、見逃すこともない								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

ごく平凡な家庭に生まれた少年。
生まれた頃からレネゲイドに覚醒している。
当たり前のように使える力は、当たり前のものではなく、それは恐怖の対象だった。
唯一の肉親である母親は、レネゲイドの力に恐怖し息子を、悪魔の子と罵り、虐待し人知れない森の奥に捨てた。
そんな森の中で彼を助けてくれる存在がいた。森に住まう動物たちだ。
彼は生まれながらにして動物と心を通わせることができた。
森にすむ動物たちの力を借り、生き抜き町まで戻ってきた。
だが彼を待っていたのは非常な現実だった。
彼の住んでいた場所には既に何も存在していなかった。違う、存在はしていた。だが彼の心はそれを受け入れることができなかった。
彼の家のドアに磔られた母親の姿が、彼が最後に見た母親の姿だった。
逃げるように町を出た。誰も知らない土地に来た。誰も自分に見向きもしない土地に来た。
ここでやり直そう。ここからすべてを始めよう。
そう思い、彼は一歩を踏み出した。だがその脚はすぐにとめることになる。
彼は生き残るすべを探した。そこで行き着いたのが探偵という職業だった。
幸い、昔から頭は悪いほうではなかった。昔から言葉を使ったペテンには自信があった。
一定の成果を上げることができた。動物と心を通わせる力を使えば、大抵の仕事は取るに足らないものだった。
だが、その日は違った。その少女は違った。
依頼をしたいといってきた。直々のご指名。天狗になっていた彼は当然疑うこともなく、彼女のその依頼を受けることにした。
依頼を受ける日。彼女が事務所にやってきた日。まだ年端も行かない少女は、自己紹介を聞いてこう告げる。
「すごい、ね……名は体、をあらわすって言うけど……ここまで違う人、はじめて。ちぐはぐ、というか、お粗末」
その少女は、ただの一言。自己紹介をし、笑顔を向けた彼にそういった。
彼のすべてを見透かすかのように。